

着せざるが然べし、坊主は道服の代りに、一重物を上に着したる時は、白衣に而も不苦候、一重ものは、衣の代りなりと被仰候、

〔茶道聞書集^甲〕八徳夏向きも着る

八徳、流芳晩年着用せられしとぞ、其時の手巾千家にあり、緋にて唐打也、啐啄齋も隠居後は八徳を着せられ、手巾は利休茶唐打也、

羽織、小坐敷茶點候時は着ぬもの、

點茶の節、羽織を脱は勿論也、平常にても小坐敷に釜掛りたる處へ入には、必羽織を脱べし、

〔茶道獨言〕茶會に呼るゝに、麻上下着用のこと常禮なり、夫につき羽織を着することは略儀のこと、故、常々の交會にも羽織は次の間、または待合などにて取置、茶の座敷に入などのこと、少々心得違ひ有べし、元來羽織といふものは略のものにて、内々往來などするとき、己の紋所をかくさん爲に、紋かくしとして着せし由、略儀のものは誰もまれること也、然るにいつの比よりか、羽織に己の紋所を染こみ、上下に繼ての禮服とはなりぬ、されば凡工商などの交り、大禮には上下を着し、次の禮には必羽織を着することになりぬ、されば今の茶に趣くとも、大體の會には、先羽織を着して然るべき哉、略儀とはいひながら、一向なきよりはましならんか、茶雅の人は、十徳八徳の類、心の儘なり、然るに羽織を着たる人は、其羽織を徹し、着ながしにて茶の座敷に入ること、一向失禮なり、出家の法服を徹して人に對するに同じ、只略儀のものとのみ心得て、其時に隨ふて用ゆることをまらざるなり、是もまた自然なり、譬へば休^〇休^千の世には、いまだ煙草繁昌ならざる時故、茶に煙草盆の具なし、然るに今は煙草世間一統なり、故に是を用ることになりぬ、是も自然のことなり、今の羽織を用ゆるも自然のことなり、何の憚ることかあるべき、

〔關田耕筆^四〕茶禮に心得がたき事あり、招るゝ、俗體の客は麻上下の禮服をつけ、迎ふる主僧は法